
恋物語

クロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋物語

【Nコード】

N4995B

【作者名】

クロウ

【あらすじ】

友達と馬鹿ばっかやっている敦。そんな敦に一つの手紙が届く。感動の長編ラブストーリーのはず…

プロローグ（前書き）

感想よろしくです♪

プロローグ

恋なんて俺には、耳障りでしかなかった。

恋をしたと思っても、それはただの好奇心。

連れと馬鹿やってる方が100倍楽しい。

そう思っていた…。

第一章 トモダチ (前書き)

アドバイスよろしくです ♪

第一章 トモダチ

三時間目のチャイムになる。敦は腹を満たすため、四時間目はサボり屋上で弁当を食べる事に決めた。

敦は友達の隆正、通称『隆』と恵太、通称『恵』を誘い屋上へ向かった。

学校はだるい……。授業なんてやってられない。太陽の当たる屋上で、弁当を食べるのは敦にとって至福の時なのだ。

――滝村 敦――

今年の四月に高校二年生になったばかりで、先輩もまだいるし後輩もできた。一番、微妙な学年だ。

隆と恵とは中学からの友達で、ずっと一緒にいる。いわゆる親友だ。

敦は、

背は高いが馬鹿で、顔はかっこいい。

運動神経はいいが運動はしない。

将来の夢ははっきりとは言えないが自動車に関わる仕事がしたいと思っている。

中学から染めている茶色。耳にピアスを右に一個、左に二個、合計三個あけている。

中学の時は、少し暴れてたり…していたが、高校には入りたかったので、受験前は隆とともに猛勉強した。

そして、やっと受かった高校。

付き合った事は、四回。どれも短く、すぐ別れた。

この時の俺にとって女なんて足手まといでしかなかった。

隆や恵達と馬鹿やって、毎日がパラダイスだった。

敦達は今もくと弁当を食べる。その途中で四時間目開始のチャイムがなるが、そんなものこの三人にはどうでもよかった。

「あゝ食った食った♪」

敦は弁当を食い終り寝転び空を見上げる。

隆と恵はまだ飯を食べてる。

「…明日さあ…、カラオケ行かね？」

口に物を含んだまま恵が歌うポーズを取りながら口を開く。

隆はお茶を一杯飲んでから

「おーけー♪」

と親指を立てる。

敦もOKだったので、「冗談で

「モチロン恵のおごりだよな」

と上半身をおこして言う。

恵は

「ばっか、お前だよ」

と言う。

そんなたわいもない会話も敦達には楽しくてしょうがなかった。

三人はいつも一緒だ。

ある一部の先輩から三馬鹿などと言われるくらいだった。

そのまま全部の授業もサボり屋上で学校が終わるまで盛り上がった。

いつもいつもよく飽きないな…と自分でも思うほど楽しい。

学校が終われば、三人ともバイトだ。

ちょっとしたバイト。

みんな同じ所に面接に行ったが、隆だけ落ちて敦と恵だけだった。

隆は知り合いがいる別のバイトをしてる。

バイトで別れる時にいつも隆は

「ばかやろー」

と冗談でいう。

敦と恵は、二人でファミレスでのバイトだった。

時々来る同級生とかに

「似合わねえ」

と馬鹿にされる。

その度

「うるせ」

と軽く言うただけだが、似合わないのは自分達でもよくわかっていた。

バイト中はピアス何かははずしてたものの、二人とも背が高く、茶髪と赤髪である。似合うはずがない。

このバイトを選んだのはちょっとバイト代が多いから。

隆は別のバイトだが、やる理由は一緒だ。

三人で自動車の修理屋やる。ガキみたいな考えだが、三人は本気だった。

そのためのバイトである。

バイトが终れば、解散。

みんな遊んでもいいのだが、疲れてるから休みたいのが本音。

だから、家へ直行。そして飯食べ風呂入り寝る。

そんな毎日だった。

第二章 ～出会い～（前書き）

アドバイスよろしくです ♪

第二章く出会い

翌日、約束通り三人でボーリングに行く事になった。

学校は弁当を食べてからふけた。敦のバイクの後ろに隆が恵は自分のバイク。

「あゝそついや、お前ってアベレージどんくらいだっけー!!??」

敦のバイクの後ろに乗りながら騒音に負けないよう大声でいう。

「216!!!」

敦も負けずに大声でいう。

それを横で走りながらみていた恵が

「叫びすぎだよ」

と呆れるように言う。

敦の答えを聞いて隆は黙りこんだ。負けていたんだろう。

そのまま、ボーリング場へついた。三人は手続きを終えて、ボールをとりに行く。

三人の選んだボールは、敦 15ポンド隆 13ポンド恵 14ポンド

「何だよ、隆。13とか軽…」

「おいおい、二人とも非力か？」

隆の選んだボールを見て恵がからかうように言つと敦がわって入つて馬鹿にするように笑う。

負けず嫌いな隆は

「重けりやいいつもんじゃねえよ」

と恵は

「俺のアベレージ236」

と敦に呟いてから席へ。

「て、てめーら…」

そして三人の白熱のボーリングがはじまった。負けた奴はジューズおごりという三人の中で暗黙のルールがあつた。

そして負けず嫌いな三人のゲームが2G終つた時、

「今んとこ俺だな」

と恵が二人を見ながら笑う。

「なんだ…あいつ……？」

敦は恵の言つた事に

「うるせ」

と言つた後に、遠くですつとこつちを見てる女に気付き指差した。

「ああ？」

「え…？」

と隆と恵が敦の指差した方を見るとそこには、ジーパンにTシャツ

という男みたいなファッションをした女がこっちをみていた。いや
…性格には敦をみていた。

「あいつは…」

と隆と恵が口を揃えて驚いたから敦は

「知ってんのか？」

と聞いたら、

「上玉じゃん!!」

二人はおおと感心するように顔をみあわせた。

「まあいいや…。よっしゃ、行くぜ？ラストゲーム!!」

女に興味がなかった敦にはジューズの方が大事だった。

ボタンを押して二人を見ると隆と恵は変な動きをしていた。横をい
ったりきたり。

「何してんだ、お前ら…」

と敦があきれたように言う

「あ…いや」

と苦笑しながら二人とも止まる。

（狙いは敦かよ…）

二人は心ん中であきれた。さっきしていた二人の変な動きは女の視線
を確かめるためだった。

それで、視線は動かずに敦をみていた。

だから二人はそう思ったのだ。

そして、白熱のラストゲームが終った。

勝ったのは敦。

負けたのは隆。

敦は

「よゆ〜」

なんていいながら、さっき女がいた場所を見る。

さっきの女はもういない。…なんだっんだ…、なんて考えながら靴をはきかえた。

「何買おっかな〜」

なんて恵が隆にからかうように言ってる。

そんなたわいもないもない会話がいつもなら楽しいはずなのに、敦はあの女の事が気になってしょうがなかった。

なんだよ……さっき何とも思わなかったのに…。

そして、隆にジュースを買ってもらう。

「ちくしょ〜」

と悔しそくに呟きながら敦の様子に気付く。

あの女誰なんだ…。同じ高校じゃないよな…

「つし！！あつし！！」

「え…？あ…ああ、何だよ？」

敦は考えていたら大声で呼ばれたので、驚いた。

そんな敦を見て隆は

「お」

と何かに気付いたのか怪しそうににやける。

恵は隆に買ってもらったジュースを飲みながら二人を見ていた。

敦はにやけてる隆を恐れ後退りする。

「ほれた…な…」

何かを企むようににやけながら呟く。

敦は

「はあ？なわけねえだろ」

と少し焦りながら否定する。

その反応を見て隆は恵のもとに行きにやにやと何かを伝える。

何を聞いたのか恵も敦を見ながらにやにやしだす。

敦は産まれて初めての恐怖感を感じた。
二人から離れ、頭を掻く。

「でも……どつかで見た事あんだよね」

恵が頭を掻き女の顔を思い出しながら言うと、隆も

「俺も俺も」

と頷く。

二人の話を遠くから聞きながら…俺も見たことあんだよね…と空を見ながら言う。

「おい。コンビ二行こうぜ」

空を見上げる敦に恵と隆が何か企んでるように後ろから声をかける。

だれだっけな……

唇を尖らせながら考えていた敦は二人の声が聞こえなかったのかそのまま考えていると

「おい!!」

と隆が敦の強く肩を叩く。

「おわ!? イタッ」

びつくりして叩かれた肩を押さえながら

「なんだよ!？」

と隆を見る。

「コンビニ行こうや」

恵が敦の前にしゃがみこみにこにこしながら言う。

敦は

「お…おう」

とにこにこする恵に苦笑しながら言う

「じゃ、俺が運転するわ」

と恵が鍵をとりバイクにまたがる。

「じゃー俺、恵のバイク」

隆もバイクにまたがり、敦も恵の後ろにまたがる。

近いから3分くらいかな…

と考える敦をよそに二人は一番近くのコンビニを通り過ぎる。
敦は一瞬黙った。

「おい……………」

恵の肩に手を置きながら低く威圧感のある声で

「どこ行く…」

と囁く。

恵は

「まあまあ」

と言いながら笑う。

隆は後ろについてきてるだけ。

敦はわけがわからなくなり黙る。

そしておよそ10後、隆と恵が行こうとした場所についた。

そこは、敦達がよく行く車屋だった。

ここの店長とは知り合いで敦達より5歳年上の男だった。

いつもいろいろ面倒見てもらっていて、敦達にとって頼りになる兄貴的存在の人がいるこの店はお気に入りなのだ。

敦達が店を出したいと思ったのもこの人の影響だった。

「透さあん」

恵と隆が店に入り大きい声で呼ぶと

「おお、お前らまた来たんかよ」

と笑いながら三人にいう。

敦も透に会えて女の事を忘れて話した。

もう店は閉まっていたので、心おきなく話した。

「透さん…ここって女来ますか？」

盛り上がった話が一段落してから隆が

「透さん…ここって女来ますか？」

と一番、隆と恵が聞きたかった事を聞いた。

敦はぎよつとしたように二人を見る。

「女あ？んなもん妹くれえしかいねえよ。何かあんのか？」

妹！？…そうだ……思い出した！！透さんの妹だ！！…どっかで見た事あると思ったら……

敦がはつとしながら考えてると

「今、いるんすか？」

と恵と隆が聞く。

「まあ、いるけどよ。なんだ？狙ってんのか？」

透は若干嬉しそうな顔をして笑うと

「いや、ちよつとこいつが」

と隆が敦の肩に手を置く。

「え…ああ、そうっすー」

あの女が透さんの妹とわかってから三人の話を聞いてなかった敦は、慌てて話を合わせるが自分が何を言ったのか理解してから

「いや…ち…」

敦は改めようとしたが透が

「おお、まだか敦、お前なら大丈夫だよ」

と嬉しそうに立ち上がり、奥に行き妹を呼ぶ。

「な…に…お兄ちゃん…寝て…」

奥から眠たそうに目をこすりながらパジャマ姿の透の妹『理菜』が透に連れられて出てくると敦の姿を見て立ち止まる。

「お？どうした？」

「な…なんでもないよ」

立ち止まった理菜に透が聞くが理菜は慌てて首をふる。

「じゃ、透さん…俺ら用事なんでこれで…」

理菜が来た途端、立ち上がり隆と恵が透にあいさつしてからそくさ出ていこうとすると

「え…ええ！？」

と焦るように敦が言う。

「じゃあな敦」

にやにやとにやけながら二人は敦に手をふり、透にもう一度あいさつしてから恵のバイクに二人乗りで帰っていった。

最初から…これを企んだのか…

「敦」これがお前の目当ての妹だ」

理菜の頭をぼんぼんと叩きながら言つと、敦は

「目当てつてそんな…」

と慌てる。

理菜は

「ちよつと…お兄ちゃん…いるなら言つてよお…」

と小声で透に言つ。

「あん…？…ああ…そうか…そうだったな」

理菜の言葉に何か思い出したように言い、敦を見て笑いながら敦の肩を叩き、奥に歩いていく。

「透さん…！！」

「お兄ちゃん…！！」

と二人が同時に呼ぶが透は軽く手をあげて奥に入つていった。

敦は困つたように頭を掻きながら理菜に

「…こんばんわ…」

と苦笑する。

「こ…こんばんわ…」

理菜は赤くなりながらパジャマをいじくりつつ向く。

…何でこんな事になるんだよお……

どうなのお…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4995b/>

恋物語

2010年10月12日04時36分発行